

イギリス化する「中国風」：名誉革命から 18 世紀半ばの

イギリス家具に見るシノワズリ

鈴木 裕子

本論文は、家具を手掛かりとし、名誉革命（1688/89 年）から 18 世紀半ばまでのイギリス（＝イングランド）のシノワズリ¹に現れた特徴的な変化を扱う。家具におけるシノワズリ²の中心は、「中国風塗装」（japanning）であった。「中国風塗装」とは、輸入された本物の「中国や日本のラッカー家具」³のラッカー塗装やその表面に施された絵柄を模倣⁴することである。この、家具における中国風塗装は、上述の時期に、単なる中国の模倣を離れ、ヨーロッパ的な嗜好に適合し、イギリス社会に広く浸透してゆく。本論文ではこの過程を「イギリス化」と呼ぶ。この「イギリス化の過程」を歴史的にたどることが本論文の目的である。

この、イギリス家具におけるシノワズリのイギリス化は、二つの側面から捉えられる。すなわち、家具の外見そのものに関わる側面、および上流階層を超えた広い社会階層への普及という側面の二つである。

18 世紀初頭に至るまで、イギリスにおける中国風塗装家具は、輸入ラッカー家具とともに富貴の館における奢侈⁵の象徴の一つであった。このイギリス家具の中国風塗装は、国内でつられた作品数からすると、名誉革命からジョージ 2 世の治世にかけて、つまり 1690 年頃から 1720 年頃にかけて、流行の頂点を迎えた。そしてそれは次第に、ヨーロッパ内で発達した高度な塗装技術、輸入ラッカーにはない多様な色地、ヨーロッパでの流行に合わせた家具の形などを備えることになる。たとえば、中国風塗装の絵柄は、初めは輸入ラッカー家具の絵柄が忠実に模写されたが⁶、ヨーロッパ的な遠近法を取り入れた絵柄に変わる。また 1750 年代には、中国風の彫り物が家具にもちこまれ、輸入製品にはない立体的様式のシノワズリが始まる。こうしてイギリスの中国風塗装家具は、その外見において、本物の中国家具とは異なるものとなった。これがイギリス化の第一の側面である。

上述の流行が過ぎた後も、イギリスでは中国風塗装の手引きの出版が盛んに続き、中国風塗装はむしろ教養やたしなみとして広く浸透する（これらの手引きにも、ヨーロッパ的遠近法の

解説が加えられた)。また輸出向けに中国風塗装家具が製作され、ヨーロッパ各地や北米植民地にも販路を広げた。さらに 1740 年代には比較的安価な金属製品への中国風塗装が始まり、大衆化が容易になる。このように、最初は上流階層の奢侈であった家具のシノワズリは、イギリス社会の中に裾野を広げてゆく。これがイギリス化の第二の側面である。

以上の点を明らかにするため、本論文ではイギリス家具におけるシノワズリをほぼ年代順にたどる。まず第 1 節で、18 世紀初頭に至るイギリスの家具におけるシノワズリを概観し、シノワズリ家具が奢侈として受け入れられていたことを示す。第 2 節では、中国風塗装流行の頂点（1690 年頃～1720 年頃）における中国風塗装を検討し、上述のイギリス化の第一の側面を中心にみる。第 3 節は、流行の頂点が過ぎた後の時期（1730 年代～18 世紀半ば）を扱い、イギリス化の第二の側面を中心にみる。

第 1 節 奢侈としてのシノワズリ ——18 世紀初頭に至るイギリスのシノワズリ家具

繰り返せば、イギリスの中国風塗装は、1690 年頃～1720 年頃、流行の頂点を迎えた⁷。本節は、この時期の始まりに焦点をあてる。まず (1) で、イギリスの室内装飾を概観し、シノワズリが外来のさまざまな奢侈と共存していたことを示す。次に (2) で、中国風塗装家具の隆盛が招いたもう一つの家具のシノワズリである輸入ラッカー家具との競合について考察する。

(1) 室内装飾とシノワズリ家具

イギリスでは、王政復古（1660 年）後に、大陸の王宮の豪華に対する競争心や洗練された奢侈への願望が現れた⁸。名誉革命後もこれはひきつがれ、宮殿や貴族の館の室内装飾において、中国風塗装家具が、天井画、象嵌細工の家具、大鏡などとともに不可欠の要素となっていた⁹。それらはデザインにおいても製作においても、フランスやオランダに大きく依存した¹⁰。

当時流行していた室内装飾の趣味について、メアリ・イーヴリン（Mary Evelyn, 1665-85）は次のように記している。「われわれの世界は変わってしまった。外国のやり方、つまり奢侈（地球上で最も偉大で、英明で、高貴な君主を破滅させたアジア的奢侈以上の奢侈）が、われわれの間にあまねく共有され、古代の簡素を破壊しているからである」¹¹。彼女はそうした外来の奢侈として、タピストリ、ダマスク織、豪華な刺繍を施したビロード、キャビネット、磁器、飲茶用テーブル、スクリーン、トランク、燭台などに加え、豪華に中国風塗装が施された大鏡を

挙げる¹²。

こうした外来の奢侈の実態を、ハム・ハウス（Ham House, Surrey）に見よう。ハム・ハウスは1610年に建てられた。歴代の当主は国王チャールズ1世、2世と親しく、王政復古後には、フランスの建築と室内装飾に倣った大改装が行われた¹³。ハム・ハウスはまた、後述するイギリス最古の中国風塗装家具の所有でも知られ、豪華な室内装飾は同時代においても際立っていた¹⁴。そこにおいて、シノワズリは、どのような位置を占めていたのか¹⁵。

ハム・ハウスでは、1階に大ホールと家族用の食堂があり、当主と夫人それぞれの居室が左右に続く。ホールには中国風の装飾は見られない。当主の居間、寝室、私室の壁には、ダマスク織が貼られ、椅子やカーテン、ベッドなどにも同じ布が使われている。当主の家具は、当時の奢侈の典型的な象徴であった黒檀、象牙、トータス・シェル（鼈甲）、金銀細工、多色木片の象嵌などで装飾されている。そして家具の上には、中国磁器の壺（染付）が飾られていた¹⁶。

シノワズリという点で注目すべきは、まず同じ1階にある夫人の居間、寝室、私室である。そこにもダマスク織が使われ、私室にはフランス流の天井画（Antonio Verrio 作）が描かれた。夫人は、クルミ材の書斎机、紫檀の寄木細工のキャビネット、鼈甲の枠に収めた壁鏡などのヨーロッパの家具とともに、多数の中国風の家具も使った。たとえば居間には、中国風塗装のテーブルと鏡のセット（おそらくオランダ製¹⁷）があり、そのほか中国風塗装の籐椅子が8台置かれている。私室には、本物の輸入中国ラッカーの箱（茶葉や砂糖菓子用）のほか、中国風塗装の本棚2台、テーブル1台、籐椅子6台がある。飲茶テーブルを取り囲むこれらの籐椅子では、背もたれの後側にも中国風の絵柄が施されている。ジャワ製のラッカー・テーブルも、耐熱性の高さを評価され、飲茶用に使われている。加えてこの部屋では、本物の中国磁器も飲茶用に使われた。

来客に設えた豪華な装飾の部屋が並ぶ2階にも、ヨーロッパ的な装飾と並び、シノワズリが多数みられる。たとえば、食堂と客間の天井にはイニゴ・ジョーンズ（Inigo Jones）様式の石膏細工が施され、壁にはギリシア神話から題材をとったタピストリが掛けられている。客間にも豪華な敷物や家具が並ぶが、ヨーロッパのものだけでなく、中国（またはインド）製のラッカー屏風、日本製の紙の屏風なども使われている。同じ2階の「グリーン・クロゼット」には、銀細工を施した黒檀のテーブル、ダマスク織のクッション付きベンチ、そして1630年代の日本製ラッカー・キャビネットがあるが、それらすべてに、キューピッドの彫り物が施された揃い

のヨーロッパ製の脚が付けられている。隣の「ロング・ギャラリー」は絵画の展示を主とするが、ここにもヨーロッパ製の脚を付けた日本製ラッカー・キャビネット¹⁸、輸入ラッカー屏風が置かれ、さらに中国風塗装の脚をもつ絹のクッション・カバー付きベンチが置かれている。これは、残存する最古のイギリス製の中国風塗装家具である¹⁹。2階の「王妃の部屋」²⁰の主な家具は、象牙のキャビネット、中国製ラッカー屏風、日本製花鳥画の屏風である。また居間の壁には、青いビロードの縁取りと刺繍のある青いダマスク織が貼られ、壁に沿って中国風塗装の藤椅子12台が並んでいる。さらに中国製のラッカー・パネルを貼り、金色の彫り物で飾られたヨーロッパ製の脚を付けたキャビネット²¹が置かれ、私室には中国風塗装の室内用便器もある。

以上から明らかなように、シノワズリ家具は、この館では、黒檀や象牙のキャビネットと並ぶ奢侈であった。以上の輸入ラッカー家具8点、中国風塗装家具34点のうち、当主夫人の部屋には各2点と19点、王妃の部屋には各2点と14点が置かれ、特に中国風塗装を施されたシノワズリ家具はこの両者に集まっている。

奢侈は貴族やジェントリといった上流階層のみならず、富裕な中流階層にも広まっていった²²。ロンドン大火（1666年）の後、貴族やジェントリの間にはウェストミンスターに大邸宅を建てて移り住み、その大きな部屋に合わせた彫り物や中国風塗装の家具を揃える傾向が見られた²³。彼ら上流階層を顧客とする家具製作者は——その多くは中国風塗装を兼ね営んでいたが——後を追うようにイースト・エンドからコヴェント・ガーデンに移った²⁴。一方、ロンドンの商人、法律家、医者など富裕な中流階層も、家具を購入するにあたって流行に敏感になってきた²⁵。イースト・エンドに残った家具製作者、中国風塗装業者、彫り物師は、こうした富裕な中流階層の奢侈への願望に応えたのである。このような傾向は、第3節で見る、家具のシノワズリの広まりの先駆けとも考えられよう。

(2) 輸入ラッカー家具とイギリス製中国風塗装家具の競合

こうした奢侈としてのシノワズリ家具にあっては、中国等から輸入された本物のラッカー家具と、イギリスでつくられた中国風塗装家具とが競合しており、後者は前者に匹敵するほどに発達する。

たとえば、1694年、ホートン（John Houghton, 1645-1705）は、次のように記している。「ジ

ヤパン〔中国風塗装家具〕は今や、インド製のすべてに優るだけでなく、ラッカーという点においては〔本物の〕日本製ラッカーそのものにさえ匹敵するほどまで完成した²⁶。ここでホートンがいう「インド製」とは、17・18世紀のイギリスに輸入された、中国、日本、インド、ジャワのラッカー家具を指している²⁷。輸入にたずさわるイギリス東インド会社は、イギリスの絵柄の見本と家具のモデルを現地に送り、イギリスで好まれるように製作されたラッカー家具を輸入し、イギリス製中国風塗装家具と競おうとしたのである²⁸。これも次節で見るイギリス化の一つの現れと言えよう。いずれにせよ、イギリス製の中国風塗装家具は、本物と対抗しうるほど発達していたということである。

さらに東インド会社がもたらす物産について、ポレックスフェン (John Pollexfen, 1636-1715) は、1697年に次のように指摘する。

悪い雑草がたちまち繁るように、インドからもたらされる製品は、最も偉大な伊達男から最も下卑た料理女に至るまで、大喜びで受け入れられている。インドの布ほど、彼らの風采を飾るのにふさわしいものは無いかのように。インドのスクリーン、キャビネット、ベッド、掛け布ほど部屋の装飾にふさわしいものは無く、また磁器とラッカー家具ほど私室にふさわしいものは無いかのように。そして、それらを買うために鑄貨が溶かされ地金となって輸出されるということは全く考慮されていない。²⁹

また彼は、「キャビネット、磁器、ラッカーや中国風塗装家具、その他の製品の輸入は、国にとってあまりに高価で、わが国の人びとを雇用することに対する障害ともなり、利益のない浪費である」³⁰という。このように、国の経済という観点からも、イギリス製の中国風塗装家具は、輸入ラッカー家具と対抗していた。

この競合の一端は、イギリスの家具製作者や中国風塗装業者が議会で提出した、ラッカー家具の輸入制限を求める次の請願書（1710年）にも表れている。

先に述べた〔中国風塗装の〕技法と秘伝にたずさわる職人の多くは、それを偉大な完成に導いたので、あらゆる種類のインドのラッカーに優り、かつ本物の日本製にも匹敵するほどになった。...しかし商人たちは、イギリスの絵柄と家具のモデルをインドに送り、インド製

ラッカー家具を大量に（とくにこの2年の間）持ち込んでいる。³¹

かくして、18世紀初頭には、イギリス製中国風塗装家具の品質は向上し、東インド会社が輸入するラッカー家具と競うほどになってゆくのである。

第2節 外見のイギリス化 ——流行の頂点（1690年頃～1720年頃）

これらのイギリス製中国風塗装家具は、実際にはどのような外見を取り、それがどのようにイギリス化してゆくのか。イギリスにおいて中国風塗装家具が最も頻繁につくられたのは、前述のように名誉革命からジョージ1世の治世の終わりに至る間であったが、本節では、この流行の頂点におけるイギリスの中国風塗装家具を取り上げ、その外見のイギリス化を検討する。この時期のイギリス製中国風塗装家具の特徴は、第1に、高度な塗装技術、第2に、イギリスで好まれるような多様な色地、第3に、ヨーロッパで頻繁に使われる家具としての形態、第4に、遠近法をめぐって生じた中国風絵柄の変化、である。以下、(1)において、第1点から第3点を考察し、(2)において、とりわけ重要な第4点を詳しく考察する。

(1) 高度な塗装技術、多様な色地、ヨーロッパの家具の形態

第1の特徴は、高度なラッカー塗装技術である。1630年代に始まったイギリスの中国風塗装は、輸入された中国の優れたラッカー、すなわち耐久性に富んだ美しい光沢のラッカー³²を模倣した。流行の頂点を迎えたイギリス製中国風塗装家具が、豊かな光沢と耐久性のある被膜を有していたことは、前述のホートンの証言や、残存家具からも推測される³³。中国風塗装は、同時代のイギリスにおいて多数出版された技法の手引きが伝えるように、ヨーロッパ在来の樹脂を酒精や油に溶いたヴァニッシュで行われたが、流行が頂点に達した頃には、本物の輸入されたラッカー家具に匹敵するほどの光沢と耐久性を備えていた。

第2の特徴は、イギリスで好まれるような多様な色地の完成である³⁴。もともとイギリスでは16世紀から室内の壁や家具に色地の塗装がなされており、それは同時代の大陸には見られないイギリスの特色だった³⁵。輸入ラッカー家具の色地は、黒、茶、赤色に限られていたが³⁶、イギリスの中国風塗装ではそれ以外にも、白³⁷、青³⁸、緑³⁹、トータス・シェル（赤・黒の斑模様）⁴⁰などの色地が盛んにつくられるようになった。こうした多様な色地のラッカーの完成

は、中国風塗装家具と他の家具、壁、カーテン、ベッド、椅子の布などとの微妙な色の調和を可能にし、シノワズリのイギリス化をもたらした。

第3の特徴は、中国風塗装家具の形態そのものが、ヨーロッパで流行中の、シノワズリでない家具と同じだったことである。この点はより早くから輸入ラッカー家具においても見られた。たとえば、先に挙げたハム・ハウスの輸入ラッカー・キャビネットは、17世紀のヨーロッパで流行していた家具の形を、東インド会社が現地に発注してつくらせたもので、それにヨーロッパ製の脚が付けられた⁴¹。イギリス製の中国風塗装家具は、輸入ラッカー家具以上に、イギリスでの流行の変化や新たな形態の家具の出現に即応することができた。具体的には、脚付きキャビネット⁴²、書斎机（本棚付き、化粧用）⁴³、脚付きチェスト⁴⁴、長い箱の時計⁴⁵、カード・テーブル⁴⁶、多種類の椅子⁴⁷など、その時の流行に従ってつくられていった。

(2) 遠近法をめぐる中国風絵柄の変化と古典主義

第4の特徴は、この時期に生じた中国風絵柄の変化である。輸入ラッカー家具には、ヨーロッパでは見慣れない姿の人物、花、鳥、動物、道具、建物、風景、ドラゴンや鳳凰など、めずらしいモチーフの絵柄が多数描かれていた。モチーフだけでなく、描法もまた、ヨーロッパの伝統的なそれとはかけ離れていた。特に中国の絵柄における遠近法の欠如は早くから認識されており、1688年に出版された重要な技法書『中国風塗装論』においても、著者ストーカーは、巻末の「中国風塗装絵柄の雛形集」（Japan-patterns）に関して次のような断り書きをしている。

それら〔雛形〕は、中国のキャビネット、屏風、箱などに中国の最高の職人が描いた建物、要塞、尖塔、人物、岩石、その他を、〔ストーカーが〕正確に模写したものであり、不完全な部分では多少のプロポーションの修正はしたものの、遠近法を加味したり、実際にはない影を付加したりするようなことはしていない。もしそのようなことをしていたら、われわれの意図である本物の純粋なインディアン・ワーク〔＝中国の作品〕のありのままの模倣から逸脱し、経験の浅い読者諸君を大いに混乱させたことであろう。⁴⁸

中国の絵柄における遠近法の欠如は、このようにストーカーによって明確に認識されていた。しかしストーカーは、同書の序文において、上記の中国の職人による絵柄を、「その金の絵柄以

上に美しく、豊かで、荘厳なものはない」⁴⁹、と称賛している。ストーカーにとっては、「遠近法」も「影」もない中国の描法による絵柄こそが、模倣すべき「美しく、豊かで、荘厳な」中国の絵柄だったのである。

ストーカーのこうした賛辞は、当時のイギリスにあった中国観に支えられていたと考えられる。研究者ポーターがいうように、中国は、ヨーロッパから遠く離れ、古典や聖書の世界も超えた所に、太古から続いてきた、豊かで高度に進んだ独自の文明として高く評価されていた⁵⁰。その国の絵柄は、たとえヨーロッパ的な描法とは相容れぬものであろうとも、長い歴史と文化の伝統を想起させる手掛かりであるゆえに、美しく、豊かで、荘厳なものとして受け入れられたのであろう。

一方この時期のイギリスでは、上流階層の子弟の間でグランド・ツアーが盛んになりつつあった⁵¹。パブリック・スクールや大学で古典の素養を身に着けていた彼らは、グランド・ツアーを通してギリシア、ローマの遺構やイタリア・ルネサンスの建築、絵画などに直接触れて強い感銘を受け、古典を再認識し、それを自らの趣味形成の基盤とするようになった⁵²。シノワズリを牽引してきた上流階層に生じたこの変化は、中国風塗装にも影響を及ぼしたと推定される。かつてストーカーによって称賛された中国の描法による絵柄よりも、古典主義の普遍的で正確なプロポーシオンの形態が尊ばれ、しだいにイギリスの中国風絵柄は遠近法を加味したものになっていったのであろう。（後述するように、1730年代以降には、中国風塗装の技法の手引きの中でも遠近法の解説が盛んになる。）とはいえ、中国の絵柄のモチーフそのものは生き残る。それらはヨーロッパの描法で修正されたうえで、18世紀末に至るまで使われ続けるのである。

実際、そうした変化を示すものとして、この流行の頂点の時期における中国風塗装家具の中には、当時の上流階層における中国の描法とヨーロッパ古典主義のそれとの違いを主題にした作品が残されている。以下、具体例2点を見よう。第1の例は、中国の絵柄における遠近法の欠如を誇張して表現した中国風絵柄であり、第2の例は、中国の絵柄のモチーフを使いながら、それらをヨーロッパ的な遠近法によって構成される絵柄にまとめたものである。

第1の例：図版1は、イギリス製中国風塗装による〈脚付きキャビネット〉（1690-1700年）の正面扉に描かれた中国風絵柄である（図版2はキャビネット全体図）。ここには中国の絵柄における遠近法の欠如が誇張して表現されている。右側には尖塔のある中国風建物、左側にはそ

の建物よりも大きい一叢の花弁（樹木ではなく、花の咲いた草）、それらの前には、背後の花弁よりも小さい中国服の人びと、犬、そして人間よりも大きい兎などが描かれている。この絵柄の構図は、先に挙げたストーカーの『中国風塗装論』（1688年）巻末の「中国風絵柄の雛形集」8頁の絵柄（図版3）⁵³よっている。ストーカーの雛形では、尖った屋根を持つ建物が左側に描かれ、それを凌駕するような巨大な一叢の花弁が右側に描かれている。この花弁は樹木ではなく、花の咲いた草であるにもかかわらず、建物の背後または横から生えて、建物よりも高く空に聳えている。建物や花弁のモチーフを輸入ラッカーの絵柄から受け継いだストーカーは、それらをこのような異様な大きさの対比で並べることによって、先の引用にもあったように、中国の絵柄の特徴、すなわち遠近法の欠如を示している。ストーカーはこの絵柄を、櫥箱のような小さい作品用にデザインしたと断っているが⁵⁴、キャビネットの製作者はそれを、縦91cm、横96.4cm、脚と頭部飾りを加えると全高221.5cmにも達する大きなキャビネットの正面扉（図版1）に拡大して据え（花弁と建物の配置を逆にしたが）、ストーカー以上に中国の絵柄における遠近法の欠如を表現した⁵⁵。このような遠近法の欠如を強調した描き方は、流行の頂点の時期における作品に顕著である。

第2の例：図版4は、1700年頃製作された〈脚付きキャビネット〉である。ここには多数の中国モチーフが描かれている。正面扉左側には中国風の建物、太湖石、右側には中国風の岩石、その背後から伸びる大きな中国風の花弁、上空にはドラゴンなど中国伝来の架空の動物、そして地上には狩猟にいそしむ中国服の人びと、である。いずれも一目で中国を想わせる代表的な中国の絵柄のモチーフであるが、それらは、もとの中国の絵柄の文脈からは切り離され、線遠近法に基づいたヨーロッパの想像上の情景を表現した中国風絵柄の、たんなる構成要素に過ぎなくなっている。このような中国風絵柄の描き方は、18世紀後半に木製家具の中国風塗装を行ったチペンデールに受け継がれる⁵⁶。

以上の特徴が明らかにするのは、イギリス製中国風塗装家具はその流行の頂点において、塗装の材料や技法だけでなく、色地、家具としての形態、さらには中国風絵柄において、本物の輸入ラッカーとは異なっていた、ということである。そこには中国的なものの誇張や、逆にそのヨーロッパ化が見られる。いずれの場合も、「中国風」とは、イギリスにおいてつくられてきた中国の観念の表現なのであった。

第3節 裾野を広げるシノワズリ ——流行の後（1730年以降）

1720年頃を最後に、中国風塗装家具の流行は頂点を過ぎた。1758年になされたドズィ（Robert Dossie, 1717-77）の次の証言は、それをよく示すものといえよう。「[イギリスの中国風塗装]は、今日では、椅子や、テーブル、その他の家具に、昔のように頻繁には行われなくなった。わずかにお茶の盆だけが例外だ」⁵⁷。

実際、王室ご用達のキャビネット・メーカーの製作する家具にも、中国風塗装は施されず、金色の彫り物やギリシア風の格子細工のついたマホガニー家具に変わっていた⁵⁸。第1節で述べたハム・ハウスのような館にさえ、同じような傾向は見られた。すなわち、グランド・ツアーから帰国した翌1729年にハム・ハウスに住み始めた第4代当主トレマッシュ（Lionel Tollemache, 1708-70）は、1735年頃に自室を改装し、古典主義的なウィリアム・ケント（William Kent）様式の豪華なソファと椅子を多数揃えた。これ以降、中国風塗装家具の注文は、わずかに1740年頃の飲茶用テーブル2台だけである⁵⁹。

しかし、上流階層向けの作品は減ったものの、他方で、中国風塗装技法の手引き書は相次いで出版され、技法は教養やたしなみとして浸透したと推測される。中国風塗装家具の製作も続けられ、製品はヨーロッパ各国に輸出され、北米植民地には技法も伝播した。1740年代には金属製品への中国風塗装が始まり、50年代にはイギリス家具に初めての立体的シノワズリが現れる。こうして、流行が衰えた後にも、シノワズリはむしろ裾野を広げていった。本節では、(1)で技法の手引き書の出版、(2)で輸出、金属、立体的シノワズリの始まりを扱う。

(1) 相次ぐ中国風塗装の手引き書の出版

中国風塗装の手引きを含む書物は、主だったものだけでも、1690年から1720年の間に8点、その後、1760年までの間に12点、再版を含めると20点が刊行されている⁶⁰。中国風塗装家具の流行の頂点を過ぎてから、むしろ刊行が増えたことは、一般の人びとの間に関心が広まったことの表れと考えられる⁶¹。手引き書は寄宿学校の教材としてさえ使われた⁶²。本項では、それらのあまり知られていない手引き書を、以下の3つに分けてやや詳しく検討したい。[a]：純粹な中国風塗装技法の手引き書。[b]：家事・家政の指南書。[c]：工芸一般に関する解説書。

[a] : 純粋な中国風塗装の手引き書 —— 遠近法の解説

18世紀に最初に出版された手引き書は、サーモン（William Salmon, 1644-1713）著『ポリグラフィス』（1701年）の第8版⁶³である。初版（1674年）にあったイギリス古来のヴァニッシュについての記載に加えて、この第8版では中国風塗装についてはっきりと記している。サーモンは「過去の誰よりも短く、はるかに良い方法を記した」（あとがき）⁶⁴としているが、その説明は簡略過ぎて、素人の手引きとしては実用的でない。ともかく中国風塗装が、イギリスの伝統的な素描や彫版、絵画などの技法と並んで説かれたのは、これが初めてである。

スミス（Godfrey Smith 生没年不詳）著『技の学校』（1738年）⁶⁵は、最もよく使われたと推定される。この書では、金や銀の細工、ガラスやエナメル細工、銅、真鍮、錫、鋼の铸造などとともに、中国風塗装の技法が解説される。全体として体系的な記述ではなく⁶⁶、中国風塗装についても木製家具の解説だけである。しかし、従来のイギリスではあまり使われなかったコーパル・ヴァニッシュについて述べられ（171頁）、木製家具の青、白、赤、緑、黒色の中国風塗装技法が述べられているのは重要である。何度も版を重ねた（39/40/50/55/70/99年）ことは、中国風塗装家具の流行後も、木製家具の中国風塗装が行われていたことを示唆している。

これに先立つ1732年には、著者不詳『遠近法便覧』⁶⁷が出版された（同年中に第2版、1735年に第3版）。この書の巻頭では、幾何学的平面図形や立体図形を使って素人にも分かりやすいよう遠近法が解説されている⁶⁸。それに続いて、フランスやイタリアの様式にのっとった「ガラス絵の技法」⁶⁹、同じく「鉛筆画の技法」⁷⁰、「ガラス、木、金属による中国風塗装の新しく精妙な方法」⁷¹が述べられる。中国風塗装は、木製品にとどまらず、金属（鉄、真鍮）や紙製品についても解説されるが、それはフランス式の古い技法であって、当時イギリスで始まっていた優れた方法⁷²ではなかった。しかしこの書には、木製家具の中国風塗装から金属やパピエ・マッシュ（紙板）の中国風塗装へという、当時の流行や職人の技法の変化が反映されている⁷³。なおこの書にはウォルポール夫人（Lady Walpole）への献辞がある⁷⁴。

この後も、遠近法の解説を加えた中国風塗装の手引きの出版は続いた。たとえば1749年には、著者不詳『技の友』⁷⁵が出版された。ここでは遠近法の解説が詳細になされた後に、ガラス絵、鉛筆画、銅版画、中国風塗装、水彩画、精密画の順で技法が解説されている。さらに1755年には、著者不詳『遠近法による素描』⁷⁶が出版され（重版、57/68/69/97年）、そこでも、遠近法の原則、ガラス絵、鉛筆画、銅版画、「木と金属の中国風塗装」が解説された。全体の構成や

個々の記述が『遠近法便覧』（1732年）に似ているが、遠近法の解説はより詳細である。

1750年代には、遠近法を踏まえたパターン・ブックが3点出版された。その中の中国風の絵柄も、そうでない絵柄も、中国風塗装に使われた。レンズ（Bernard Lens 生没年不詳）著『新完全素描集』（1751年）⁷⁷、エドワーズ（George Edwards 生没年不詳）とダーリー（Matthias Darly, 1741-78）著『新たな中国風絵柄集』（1754年）⁷⁸、セイヤー（Robert Sayer, 1725-94）が出版した『淑女の愉しみ』（1759-60 / 62 / 71(?)年）⁷⁹である。ダーリーはチペンデールの素描の師であった⁸⁰。またセイヤーのパターン・ブックにはフランス出身のピルマン（Jean Pillement, 1719-1808）による空想的な中国風絵柄が多く含まれ、そのデザインは中国風塗装だけでなく、磁器やその他の工芸品などにも広く使われた⁸¹。前節で見たような、中国風塗装家具の流行の頂点において製作者たちが始めたヨーロッパ的遠近法による中国風絵柄は、このように手引き書によって定式化され、18世紀半ばにはイギリスの一般的な中国風絵柄となっていたと考えられる。

〔b〕：家事・家政の指南書 ——常識としての中国風塗装

1704 [05] 年に出版された W. S. 著『家庭の宝』⁸²の本文は、「知識の書」という書き出しで始まっている。この書には誕生から14歳までの子供の病い、助産婦の役割、占星学、魚釣り、などさまざまな事柄に関する知識が記されている。その中に、「中国風塗装」（第5章）や「水彩画と油彩画」（第6章）という章があり、中国風塗装については材料、道具、技法が、簡略に述べられ、水彩画や油彩画もごく簡単な記述である。

また1710年に出版されたサーモン（William Salmon）著『家庭の辞書』⁸³も同類の書である。この書は、料理、調香、農業、家庭内に備えるべき生薬などについて書かれた、いわば家事・家政の指南書であるが、「中国風塗装用ヴァニッシュのつくり方」、「赤、黒、青、その他の色での中国風塗装の方法」という項目があり、必要な材料と各種の道具が記されている⁸⁴。記述が簡略過ぎて、これによって中国風塗装を行うことは不可能に近いが、中国風塗装技法の概略を知るだけならばこれで足りる。

さらに1760(?)年に出版されたモンタギュー（Peregrine Montague 生没年不詳）著『家庭の必携書』⁸⁵もまた、その種の書物である。馬の飼い方、頭髪や歯の健康、庭仕事などに交じって「中国風塗装の技法」⁸⁶が述べられ、ラック樹脂や酒精の名前も挙っている。中国風塗装は、

この時期のイギリスにおいて、日常生活の指南書の中にも登場する知識となっていた。

家事・家政の諸事の中で中国風塗装の技法が述べられるのは、イギリスではなかった。1711年、フランスのデメリー（Antoine d' Emery, 1645-1715）の著書の第7版が『人工と自然の最も価値ある秘儀』⁸⁷として英訳出版された。デメリーの書もまた、健康、娯楽、美容、調香、彩色、絵画などとともに、「黒い塗料を削って下地の金色を見せる技法」を述べ、それが「中国の製品のように美しい」としている⁸⁸。しかも英訳者は、このフランスの方法とはまったく異なるイギリスの中国風塗装技法を大量に補足書き込みしている⁸⁹。デメリーの書は、初版（1674年）が1685年に英訳され、その時には書き込みはされなかった。しかし2度目に英訳された1711年にそのような書き込みがあるということは、イギリスが自国の中国風塗装技法に自信を深めていたことの表れだと推測しうる。

[c]：工芸一般に関する解説書

1758年に出版されたドズィ著『技の手引き』（1758 / 64 / 96年）⁹⁰は、上の[a] [b]とは異なり、「工芸商工業奨励協会」（The Society for the Encouragement of Arts, Manufactures and Commerce）の依頼によって書かれた本格的な技法の解説書である⁹¹。本書では、油絵、水彩画、フレスコ画、ガラス絵、エナメル、銅版画、陶磁器の絵付、中国風塗装などの技法が述べられるが、材料についての徹底した解説が特徴である。また、古い技法を記録⁹²する一方で、金属への中国風塗装の最新の技法⁹³や、パピエ・マッシュの詳細な解説⁹⁴など、従来の技法書にはない広範囲の記述がなされている。中国風塗装が、成分においても輸入ラッカーとは異なることをイギリスで初めて明らかにしたのは本書である。ドズィは、漆の扱いは中国風塗装とは異なる技術を必要とし、健康上の問題も生じるとして、漆を使わないように勧めている⁹⁵。ドズィは中国風塗装を次のように定義している。「中国風塗装とは、物体を不透明な色付きヴァニッシュの下地で覆う技である。その上には、色または金箔〔金・銀の箔やブロンズ粉〕で絵柄を描いてもよいし、絵柄なしにしておいてもよい」⁹⁶。

ニーヴ（Richard Neve 生没年不詳）著『実験と観察の完全で正確な歴史』（1702/03年）⁹⁷も上と同じく工芸一般、さらには技術一般に関する専門的な解説書であり、建築、農業、園芸、化学、絵画、中国風塗装、象嵌、彫り物といった広範な分野ごとに、過去の技法を整理したものである。中国風塗装は「木部を美しく着色する」という項目において、イーヴリン、ストー

カー、サーモン、デメリーの技法が容易に比較できるように記してあり、イギリスにおける中国風塗装技法の長い蓄積を感じさせる。

(2) イギリス製中国風塗装家具の輸出、金属製品の中国風塗装、立体的シノワズリの始まり

以上のような多くの手引き書を通して、中国風塗装の技法は、イギリス社会の広い層へと浸透していったと考えられる。次にそれが実際の製品としてどのように広がっていったのかを、製品の輸出、金属製品への応用、立体表現の出現などを通して検証したい。

[a] : イギリス製中国風塗装家具の輸出

18世紀におけるイギリス家具の輸出についての記録は断片的で⁹⁸、そのなかで中国風塗装の全貌を知ることはさらに難しい。残された事例からおおよその傾向を推測するほかない。研究者ギルバートの家具データベースによれば、1720年代に製作された11例の中国風塗装家具のうち7例が輸出されている⁹⁹。またハスは全体で27例のイギリス製中国風塗装家具を掲げているが、うち4例が輸出された製品であって、すべて1720年代に製作されたものである¹⁰⁰。輸出先はいずれも、ヨーロッパ大陸である。

18世紀前半におけるイギリス製中国風塗装家具の主要な輸出先は、スペインとポルトガルであった。とくに、イギリスとの政治・通商関係が比較的安定していた1720-40年のスペインは、中国風塗装家具の重要な市場となった¹⁰¹。製品は、輸出先の嗜好や気候に合わせた「スペイン・ポルトガル向けにデザインされた製品」¹⁰²であった。イギリスの鮮やかな緋色地に明るい金の装飾がなされた製品が、スペイン・ポルトガルでは柔らかな赤地に豊かなブロンズ色となった¹⁰³。白や黄色の地も輸出用につくられた。中国風塗装の磨きが十分でなく、当初の明るい緋色があせた例も多い。スペインとポルトガルに輸出された中国風塗装家具の多くは商標がついていないが、水準からみてセント・ポール周辺の業者の製品であると推測される¹⁰⁴。

中国風塗装家具はドイツにも輸出された。1720年代の作である緑地に金と赤で装飾を施された鏡台や¹⁰⁵、18世紀初めの製品である黒地に金と多色で装飾した柩型の箱¹⁰⁶が残されている。鮮やかな赤地に金の装飾の書斎机も輸出されたが、その様式はドレスデンのマルティン・シュネル(Martin Schnell, c.1675-1740)に影響を及ぼし、イギリス風の赤い書斎机(1727-30年)を生んだ¹⁰⁷。

一方、北米植民地向け家具の輸出は、1720年代から増加し、18世紀半ばまで続いた¹⁰⁸。輸出品は鏡台、椅子、キャビネットなどで¹⁰⁹、ロンドンの流行を追うようにアン女王スタイルの家具も1730年ごろ入っていった。輸出品は南部の富裕な農場主、フィラデルフィアやチャールズトンの商人¹¹⁰、さらにボストン商人に買われた¹¹¹。

アメリカでは、イギリスからの家具の輸入の増加とほぼ並行して、イギリスの技法が伝わり、中国風塗装が始まった。ボストンでは1720年以降、「ハイボーイ」とよばれる高脚のキャビネット、鏡台、ティー・パーティ用の盆に中国風塗装が施されるようになった¹¹²。中国風塗装家具は、ニュー・ヨークやフィラデルフィアでも製作された¹¹³。フィラデルフィアにはトマス・アフレック（Thomas Affleck 生没年不詳）やトマス・ジョンソン（Thomas Johnson 生没年不詳）のように、18世紀前半を通してロンドンから職人が移住していた¹¹⁴。アメリカ製品は、18世紀半ばにはイギリスからの輸入品に取って代わった。

イギリスの中国風塗装は、製品輸出や技法の伝播を通して、外国へと影響を与える側に転じていた。

[b]：金属・紙製品への中国風塗装¹¹⁵

金属製品の中国風塗装は、前述の『遠近法便覧』（1732年）にも記されていた。それはフランス式の金属への中国風塗装の技法であり、木製家具の中国風塗装と同じように樹脂を酒精に溶いたヴァニッシュで行われた。その被膜には光沢はあったが剥がれやすかった¹¹⁶。これに対してイギリスでは、亜麻仁油を金属に塗って加熱する方法が行われていた¹¹⁷。亜麻仁油による被膜には耐久性があったが、光沢は酒精ヴァニッシュによる被膜に劣った¹¹⁸。しかし1740年代になるとポンティプール（ウェールズ南部）において、アスファルトを亜麻仁油に溶いたヴァニッシュを塗って加熱精製したブリキや銅製品が登場し、従来の欠点が解決された¹¹⁹。ポンティプールの金属製品は、輸入ラッカーにも劣らぬ光沢と耐久性のある黒い被膜で覆われ、その表面には従来のイギリス木製家具の中国風塗装に倣った金の中国風絵柄が施され¹²⁰、製品はポンティプールの「ジャパン・ウェア」¹²¹と呼ばれた。

ポンティプールで始まった金属製品の中国風塗装は、18世紀中頃にはバーミンガムとその近郊、さらにロンドンにも伝播した。耐熱性を活かした卓上鍋やプレート保温器はその代表的製品となった。18世紀後半にはバーミンガムにおいて強度が改良されたパピエ・マッシュェが現れ、

その製品にも金属と同じ中国風塗装が施された。紅茶ポット、やかん、茶筒、盆は、飲茶の流行にも支えられイギリスの一般の人びとの間に普及し、装身具や馬車などにも用途を広げた。こうしてイギリスのシノワズリは、金属や紙への中国風塗装を通して、18世紀にはイギリスの広い層の人びとの間に浸透し、ヨーロッパとアメリカにも輸出された。

[c] : 立体的シノワズリの始まりと中国風塗装の復興¹²²

中国風塗装は、ドズィの気付かないところで、1754年には復興していた。すなわち、イギリス家具のシノワズリは、庭園のシノワズリ建築からも影響を受けるのである。シノワズリ家具の流行が衰えていた1740・50年代には、庭園におけるシノワズリ建築の流行が始まった。たとえば、1750年頃には、キュー庭園（Surrey）に孔子廟（House of Confucius）が建てられ、中国風に反り返った屋根、ドラゴンの丸彫り、中国風の格子細工、などで飾られた。他方、リネル父子（William Linnell, c.1703-63; John, 1729-96）は、1754年に、バドミントン・ハウス（Gloucestershire）の「チャイニーズ・ベッド・ルーム」にベッドを納入した。ベッドは孔子廟を飾ったのと同じ中国風の装飾要素で飾られていた。中国風の屋根、中国風の丸彫り、中国風の格子細工などの立体がイギリスの家具に現れたのは、この時が初めてである。こうして立体的シノワズリが始まり、それに伴い中国風塗装も復活した。

さらにこれらをイギリス家具の様式として洗練させ、発展させたのは、チペンデル父子（Thomas Chippendale: 父 1718-79; 子 1749-1822）であった。18世紀後半になると、貴族や富裕な中流階層の中には、「チャイニーズ・ルーム」をつくる者が現れ、立体的シノワズリや中国風塗装で飾られたイギリス家具を置くようになる。その部屋は、同時代の本物の「中国の部屋」の模倣ではなく、あくまでもイギリスにおける「中国風」様式の家具が置かれた部屋であった。

結

以上、本論文で述べた、中国風塗装のイギリス化の過程を振り返っておこう。

シノワズリ家具は、イギリスにおいてまずは奢侈として姿を現わした。その中心となった中国風塗装家具は、名誉革命から18世紀半ばまでの間に大きく変化する。

まずイギリスにおける中国風塗装家具は、輸入ラッカー家具との競争を経て、1690年頃から1720年頃にかけて流行の頂点を迎えるが、ヨーロッパ内で発達した高度な塗装技術に加え、輸

入ラッカーにはない多様な色地、流行に合わせた家具の形態、さらに、おそらく古典主義からの影響もあって、遠近法を取り入れた中国風絵柄を特徴とするようになる。こうして、イギリスの中国風塗装家具は外見において輸入ラッカー家具から遠ざかる。これがイギリス化の第一の側面である。

上流階層向けの中国風塗装の作品数が減り、流行の過ぎた後も、中国風塗装の手引きは相次いで出版された。また中国風塗装は一般家庭のたしなみとしても行われ、その技法についての知識は教養の一つともなった。製品はヨーロッパ各地や北米植民地に輸出され、北米植民地においてはイギリスの技法による製品がつくられた。1740年代には金属製品への中国風塗装が始まり、日用品として普及し、輸出された。また50年代には立体的なシノワズリ様式も生まれ、本格的なシノワズリ家具が復活する。このように、奢侈に始まった家具のシノワズリがその裾野を広げたことが、イギリス化の第二の側面である。

〔図版一覧〕

- 図版 1. 脚付きキャビネットのキャビネット部分（図版 2 の拡大図）、作者不詳、1690-1700年、イギリス。©Victoria and Albert Museum, London.
- 図版 2. 同上脚付きキャビネット（全体）。©Victoria and Albert Museum, London.
- 図版 3. John Stalker and George Parker, *A Treatise of Japaning[sic] and Varnishing* (Oxford, 1688; repr. Reading: Alec Tiranti, 1998), [Japan-patterns], 8. ©Alec Tiranti Ltd.
- 図版 4. 脚付きキャビネットのキャビネット部分（図版 5 の拡大図）、作者不詳、1700年頃、イギリス。© French & Company LLC.
- 図版 5. 同上脚付きキャビネット（全体）。© French & Company LLC.

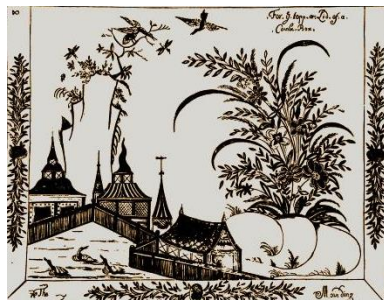
図版の使用に関して、図版 1、2 については Victoria and Albert Museum, London（Online 版については、2019 年までの 5 年間）、図版 3 については Alec Tiranti Ltd、また、図版 4、5 については French & Company LLC（旧社名 Messrs. French and Company, New York）から、ご厚意をいただいた。関係各機関に感謝申し上げます。



図版 1



図版 2



図版 3

- 図版 1. 脚付きキャビネットのキャビネット部分（図版 2 の拡大図）、作者不詳、1690-1700 年、イギリス。©Victoria and Albert Museum, London. [補注：図版使用許諾期間終了のため削除しました]
- 図版 2. 同上脚付きキャビネット（全体）。©Victoria and Albert Museum, London. [補注：同上]
- 図版 3. John Stalker and George Parker, *A Treatise of Japan[ic] and Varnishing* (Oxford, 1688; repr. Reading: Alec Tiranti, 1998), [Japan-patterns], 8. ©Alec Tiranti Ltd.



図版 4



図版 5

図版 4. 脚付きキャビネットのキャビネット部分（図版 5 の拡大図）、作者不詳、1700 年頃、イギリス。
© French & Company LLC.

図版 5. 同上脚付きキャビネット（全体）. © French & Company LLC.

¹ 「シノワズリ (chinoiserie)」は *The Concise Oxford Dictionary of Art and Artists*, 2nd ed. (1996), 104 によれば、「西洋の美術や建築で、中国の諸様式を模倣したもの」である。シノワズリは 17・18 世紀には、家具、陶磁器、建築装飾、日用雑貨、織物、また絵画や演劇の題材、さらに思想にも現れた。当時はまだこの語は存在せず、「Chinese」が使われた。オーナーによれば、シノワズリは、ヨーロッパ人が抱いた理想的帝国「キヤセイ」の伝説に基づく中国幻想の表現である。Hugh Honour, *Chinoiserie: The Vision of Cathay* (1961; New York, 1973), 1, 7-8. またインピーによれば、シノワズリは、輸入された産物からの衝撃や噂話に基づくヨーロッパ人の東洋観の表明である。Oliver Impey, *Chinoiserie: The Impact of Oriental Styles on Western Art and Decoration* (New York, 1977), 9-10. いずれもシノワズリをヨーロッパ内的な現象ととらえる点で本論文と認識を同じくするが、この時期のシノワズリ家具の特徴とそのイギリス化は、それらだけでは説明することはできない。

² 家具におけるシノワズリの表現手段には 4 種類あった。①輸入ラッカー家具にヨーロッパの脚を付ける、②輸入ラッカー家具から切り出したパネルをヨーロッパの家具の表面に貼る、③中国風塗装、すなわち注 4 で述べるような材料とヨーロッパの技法を用いて輸入ラッカーを模倣する、④中国風の格子細工や丸彫りをヨーロッパの家具に付ける、である。本論文での主な対象は③であり、必要に応じ、それを輸入ラッカー家具の加工品 (①、②) と対比する。

³ 「ラッカー (lacquer)」は *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (1989), 574 によれば、「さまざまな種類の樹脂から採られたヴァニッシュで、固い光沢をもたらすことのできるもの」、また「それによって塗装された製品」である。漆 (*Rhus vernicifera*) による「日本のラッカー (Japanese lacquer)」はラッカーの代表とされる。以下この定義に従って、漆塗りで塗装された家具を「中国や日本のラッカー家具」と表記する。なおお文中の「ヴァニッシュ (varnish)」は、同じく 451 によれば、「樹脂を液体に溶かした物質で、表面全体に塗り広げて、固く、光沢があり、透明で、耐久性と装飾性に富んだ被膜を与えるもの」とされる。

⁴ この模倣は、ラック、サンダラック、コーバル、ターペンタインなど多種類のヨーロッパ在来の樹脂を、酒精や油に溶いたヴァニッシュで行われ、英語では「ジャパニング (japanning)」、あるいは「ヨーロッパのラッカー (European lacquer)」とよばれる。Marianne Webb, *Lacquer: Technology and Conservation. A Comprehensive Guide to the Technology and Conservation of Asian and European Lacquer* (Oxford: Butterworth Heinemann, 2000), 99-112. ‘japanning’ の初出は、John Stalker and George Parker, *A Treatise of Japanning[sic] and Varnishing* (Oxford, 1688), Pref.[n.p.], 1. 以下、中国や日本のラッカー (漆塗り) の模倣 (japanning) を「中国風塗装」と表記する。中国風塗装を施された家具は、17 世紀半ば以降ヨーロッパ各地に現れたが、呼び名は国によって異なり、英語では japanware、フランス語では vernis、ドイツ語では indianishes Werk、オランダ語では lac-werk と呼ばれた。これに対し漆塗り家具の呼び名は、英語では lacquerware、フランス語では vernis de la chine、ドイツ語とオランダ語では、模倣との区別なしに、それぞれ indianishes Werk、lac-werk であった。Hans Huth, *Lacquer of the West: The History of a Craft and Industry 1550-1950* (Chicago: The University of Chicago Press, 1971), 20, 37. なお 17・18 世紀のヨーロッパで使われた樹脂や溶剤は、今日の同名のものと必ずしも同じではない。Webb, op. cit., 100. たとえば本注冒頭に挙げたターペンタインは「ヴェニス・ターペンタイン (Venetian turpentine)」など含油性樹脂の総称であり、今日よく使われる「ターペンタイン (揮発性油、spirit of turpentine)」とは異なる。

⁵ 「奢侈 (luxury)」は、17・18 世紀のイギリスにおいて道徳的にも経済上の観点からも論議的になっていた。しかし当時の奢侈を扱った研究、たとえば、Maxine Berg and Elizabeth Eger (eds.), *Luxury in the*

Eighteenth Century: Debates, Desires and Delectable Goods (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2003) においても、何をもって奢侈とするかは示されていない。奢侈は当時、後述のメアリ・イーヴリンに代表されるように、儉約と簡素に対立するものとみなされた。一方マンデヴィルは、経済的観点から奢侈を肯定するために、「人が生きていくうえで直接必要でないあらゆるもの」と極端に定義した (Bernard Mandeville, *The Fable of the Bees; or Private Vices, Public Benefits* [1714], ed. Phillip Harth [Harmondsworth: Penguin, 1970], 107)。近年の研究においては、奢侈への志向が貴族からジェントリや中流階層へと広がりつつあったことが明らかにされているが、その奢侈を代表するものは、外国、とくにアジアの物産であったとされる (Maxine Berg, *Luxury and Pleasure in the Eighteenth-Century Britain* [Oxford: University Press, 2005], 46-84)。

⁶ Wilfried De Kesel and Greet Dhont, *Flemish 17th Century Lacquer Cabinets* (West-Vlaanderen: Stichting Kunstboek, 2012), 32.

⁷ Robert W. Symonds, 'The English Japanner's Trade', *Connoisseur*, 100 (1937), 242. シモンズは残存例の多さを最盛期の証拠としている。筆者の調査でも、17世紀初めから18世紀半ばまでに製作された中国風塗装家具の残存例56点中35点がこの30年間に集中している。Christopher Gilbert, *Pictorial Dictionary of Marked London Furniture 1700-1840* (Leeds: Maney and Son, 1996); Huth, op. cit.; Symonds, 'Japanner's Trade'などより算出。

⁸ Peter Ward-Jackson, *English Furniture Designs of the Eighteenth Century* (London: Her Majesty's Stationery Office, 1958), 2-3.

⁹ Charles Saumarez Smith, *Eighteenth-Century Decoration* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1993), 24.

¹⁰ Ward-Jackson, op. cit., 5-7.

¹¹ Mary Evelyn, *Mundus Muliebris: or The Ladies Dressing-room Unlock'd, ...* (London, 1690), Pref.[n.p.].

¹² Ibid., 8. ここで中国風塗装家具は「ジャポニアン」と呼ばれ、「ラッカーあるいはチャイナ・ポリシングでワニスがかけたもの、もしくは風変わりで空想的なもの」とされている。Ibid., 18.

¹³ 改装は、初代当主 William Murray, 1st Earl of Dysart, (d. c.1654) の後を継いだ娘 Elizabeth (1626-98) と、その2度目の結婚相手 John Maitland, Duke of Lauderdale (d. 1682) の代に行われた。

¹⁴ Maurice Tomlin, *Ham House* (London: Victoria and Albert Museum, 1986), 10.

¹⁵ ハム・ハウスでは、ナショナル・トラストとヴィクトリア・アルバート博物館によって、17世紀の室内装飾のできるかぎり正確な保存が試みられている。それに伴い、何回も行われた改装に関する詳細な研究が続いている。Peter Thornton and Maurice Tomlin, *The Furnishing and Decoration of Ham House*, ed. Christopher Gilbert (London: Furniture History Society, 1980); Tomlin, op.cit.。筆者はこれらに基づいて1690-1720年頃の室内装飾を推測した。

¹⁶ 館の磁器はほとんどが康熙帝時代(1662-1722年)のものである。Tomlin, op.cit., 19.

¹⁷ Thornton and Tomlin, op.cit., 65.

¹⁸ この脚付きキャビネットは、日本製のラッカーもヨーロッパ製の脚も優れているため、女王のベッド、象牙のキャビネットとともに、この館の最も大切な家具とされた。Ibid., 134.

¹⁹ ベンチの脚は、ヨーロッパのヴァニッシュを用いて光沢のある黒地に塗られ、表面には金で中国風の絵柄が施されている。1635-40年製。Ibid., 26-7, Fig. 39.

²⁰ チャールズ2世王妃 (Queen Catherine of Braganza) の来訪に備えて1673年につくられたもの。

²¹ 中国製のラッカー屏風をヨーロッパで解体・切断し、パネルとしてヨーロッパ製のキャビネットの表面に貼ったもの。おそらくオランダ製。

²² 中産階級の奢侈志向は18世紀に始まるとされてきた (John Brewer and Roy Porter [eds.], *Consumption and*

the World of Goods [London: Routledge, 1993]) が、すでに 17 世紀からみられたことが明らかにされている。Linda Levy Peck, *Consuming Splendor: Society and Culture in Seventeenth-Century England* (Cambridge: Cambridge UP, 2005).

²³ Robert W. Symonds, 'English Furniture and Colonial American Furniture-A Contrast', *Burlington Magazine*, 78 (Jun., 1941), 183.

²⁴ Robert W. Symonds, 'English Eighteenth-Century Furniture Exports to Spain and Portugal', *Burlington Magazine*, 78 (Feb., 1941), 57.

²⁵ Symonds, 'English Furniture', 184.

²⁶ John Houghton, *A Collection for the Improvement of Husbandry and Trade*, 4vols. (London, 1727), I, 275 (Friday, July 20, 1694).

²⁷ 輸入されたラッカー家具は一般に「インドのラッカー ('India lacquer'; 'Indian lacquer'; 'right Indian lacquer')」と呼ばれた。その中で日本製は最も高い評価を得ていた。そのため、日本製を特定する用語として 'right Japan'、'old Japan' などが使われた。これに対してヨーロッパ製、すなわち中国風塗装家具には、'japan'、'japanned' の表現が使われた。Symonds, 'Japanner's Trade', 238-9.

²⁸ 東インド会社は、従来のキャビネット (注 41 参照) に加えて、他のラッカーについてもヨーロッパの形態に合わせた製作を注文した。Ibid., 238.

²⁹ John Pollexfen, *Discourse of Trade, Coyn, and Paper Credit and of Ways and Means to Gain, and Retain Riches* (London, 1697), 99. なおここで「地金」とは、金貨を溶かして金塊や棒に戻したもののこと。

³⁰ Ibid., 126.

³¹ *The Case of the Japaners[sic.] of England* [1710], British Library, *Tracts on Trade*, vol. 13, no. 1. 請願の結果、輸入品には関税がかけられ、イギリスの中国風塗装業者は地歩を確立した。

³² イーヴリンは輸入ラッカーについて、「木部を保護し美しくするうえで、従来のどのような発明発見にも優る」と称賛した。John Evelyn, *Sylva*, 2nd edn (London, 1670), 198-9. なおイーヴリンは絵柄については言及していない。

³³ 当時の家具の保存状態については、Melvin Wachowiak Jr. and Donald William, 'Conservation of an 18th Century English Japanned Surface', in Sophie Budden and Frances Halahan (eds.), *Lacquerwork and Japanning: Postprints of the UKIC Conference 1994* (London: United Kingdom Institute for Conservation, 1994), 27-9.

³⁴ Symonds, 'Japanner's Trade', 237.

³⁵ Huth, op. cit., 37.

³⁶ 当時、中国や日本では、漆塗りの色地は、赤、黄、緑、茶、黒に限られていた。日本で漆の化学的性質が解明され、それによって色が自由に出せるようになったのは、20 世紀に入ってからのことである (荒川浩和「漆と漆絵」『日本の美術』[至文堂、1979]、42-5)。

³⁷ 〈アン女王のクリーム色ラッカー・キャビネット〉作者不詳、1710 年頃 (Private Collection, The Bridgeman Art Library, London).

³⁸ 長い箱の時計、時計は James Markwick 作、1725 年頃 (Victoria and Albert Museum, London).

³⁹ 鏡台、作者不詳、1710 年頃 (Lacquer Museum, Münster).

⁴⁰ 脚付きキャビネット、作者不詳、1690-1700 年 (Victoria and Albert Museum, London).

⁴¹ 脚付きキャビネットは 16 世紀初めにイタリアカニユルンベルクで始まった家具の形態である。ポルトガルとスペインの注文で、中国、日本、インド、メキシコで、この家具のキャビネット部分だけが製作され

た。Impey, op. cit., 111. 17 世紀におけるこの形態の展開については Oliver Impey, 'Japanese Export Lacquer of the 17th Century', in William Watson (ed.), *Lacquerwork in Asia and Beyond, Colloquies of Art and Archaeology in Asia*, 11 (London: Percival David Foundation of Chinese Art, 1982), 124-58.

⁴² 脚付きキャビネット、作者不詳、17 世紀末 (Lady Lever Art Gallery, Port Sunlight).

⁴³ 書斎机、作者不詳、1710 年頃 (Palazzo Pallavicini, Rome); 書斎机 (本箱)、W. Price 作、1713 年 (Sotheby's New York, 24 Oct. 1992).

⁴⁴ 脚付きチェスト、作者不詳、1710 年頃 (Art Institute of Chicago).

⁴⁵ 長い箱の時計、時計は Thomas Windmills 作、1715 年頃 (Victoria and Albert Museum, London).

⁴⁶ カード・テーブル、Giles Grendy 作、1730 年頃 (Metropolitan Museum of Art, New York).

⁴⁷ 椅子、作者不詳、1710 年頃 (Victoria and Albert Museum, London). その他多数。

⁴⁸ Stalker, op. cit., The Epistle to the Reader [n. p.].

⁴⁹ Ibid., Preface [n. p.].

⁵⁰ David Porter, *The Chinese Taste in Eighteenth-Century England* (Cambridge: Cambridge UP, 2010), 21.

⁵¹ グランド・ツアーは、17 世紀初期に始まり、世紀後半には上流階級の子弟の間に、さらに 18 世紀にはより広範な層に広まった。Edward Chaney, *The Evolution of the Grand Tour: Anglo-Italian Cultural Relations since the Renaissance* (London: Frank Cass, 1998), 161-7; Tim Richardson, *The Arcadian Friends* (London: Transworld Publishers, 2007), 59-60.

⁵² Michael Snodin, 'Who Led Taste?: Tudor and Stuart Britain, 1500-1714', in *Design and The Decorative Arts Britain 1500-1900* (London: V&A Publications, 2001), 65-93(85).

⁵³ Stalker, op. cit., [Japan-patterns], 8.

⁵⁴ Ibid., 40.

⁵⁵ 尖塔のある中国風建物はストーカーのそれに比して立派である。この製作者は尖塔をヌイホフ (John Nieuhoff, 1618-72) やダパー (Olfert Dapper, c.1635-89) から受け継ぎ (John Nieuhoff, *An Embassy from the East-India Company of the United Provinces, to the Grand Tartar Cham, Emperor of China*, [1665; London, 1673]; Olfert Dapper, *Godenkwaardig Bedrijf derNederlandse Oost Indische Maetschppije: Beschrijving van geheel Sina*[Amsterdam, 1670], 204-5)、中国風の建物は、屋根のある屏などから、コロマンデル・ラッカー屏風に拠っていると推測される (W. De Kesel and Greet Dhondt, *Coromandel Lacquer Screens* [New York: Art Media Resources, 2002], 42-3)。なお図 1 の前景に置かれた兎も、ストーカーの小動物の描き方に則している (Stalker, op. cit., [Japan-patterns], 15)。

⁵⁶ 鈴木裕子「チペンデールのシノワズリ —中国風彫飾と中国風塗装を中心に—」『日本 18 世紀学会年報』第 27 号 (2012 年)、54-67(62-5)。

⁵⁷ Robert Dossie, *The Handmaid to the Art*, 2 vols (London, 1758 / 64 / 96), II, 407.

⁵⁸ Geoffrey Beard, 'Three Eighteenth-Century Cabinet-Makers: Moore, Goodison and Vile', *Burlington Magazine*, 119, (Jul., 1977), 483-4.

⁵⁹ 第 4 代当主の家具の注文については、Thornton and Tomlin, op. cit., 181-3。ソファは ibid., Fig. 148、シノワズリ家具の注文は、以前からハム・ハウスにあった日本製ラッカー・キャビネットの天板を切り取って新しいテーブルにリフォーム (1730 年)、中国製壁紙を利用した暖炉用衝立 (1732 年)、中国風塗装のテーブル (1740 年頃)、中国風塗装の三脚テーブル (1740 年頃)、中国製ラッカー・チェストにイギリス製の台を付加 (18 世紀中頃)、中国風格子細工を施したテーブル (1760 年頃) が確認されている (それぞれ、ibid., Fig.

148、181、174、175、180、173)。

⁶⁰ これに対して、中国風塗装の始まりからの 60 年間 (1630-1690 年) にイギリスで出版された技法書は以下の 5 点にすぎない。最初の中国風塗装の手引きである Evelyn, *Sylva*, 2nd ed., op.cit.(1670), 198-9、ヴァニッシュについての言及がある公刊書、William Sanderson, *Graphice* (London, 1658)、および William Salmon, *Polygraphice* (London, 1672)、中国風の装飾についての言及がある公刊書、Antoine d' Emery, *Modern Curiosities of Art and Nature* (London 1685), trans. from *Recueil de curiositez rares et nouvelles* (Paris, 1674), 329-32、中国風塗装全般の詳細な解説書、Stalker, *A Treatise of Japanning*, op.cit. (1688)である。

⁶¹ これに対して中国風塗装を行う職人 (japanner) は、親方のもとの徒弟修業とアカデミーなどの養成所で技能や知識を修得した。職人の養成については、Pat Kirkham, *The London Furniture Trade 1700-1870* (London: Furniture History Society, 1988), 82-108. 当時の職人の技法は、British Museum, Sloan MS. にも手稿として残されている。Frederick W. Gibbs, 'Historical Survey of the Japanning Trade -II', *Annals of Science*, 8 (1952), 89-90. パターン・ブックは、職人にも利用された。

⁶² Margaret M. Vernet (ed.), *Memoir of the Verney Family* (London: Longman Green, 1899), IV, 221. Edmund Verney は 1683 年、学校で中国風塗装を習いたいという娘の希望を快諾している。

⁶³ Salmon, op. cit. 8th ed. (London, 1701).

⁶⁴ Ibid., Postscript [n.p.], II-6.

⁶⁵ Godfrey Smith, *The Laboratory, or School of Arts, trans. from German* (London, 1738/39 / 40 / 50 / 55 / 70 / 99).

⁶⁶ Dossie, op. cit., I, xx.

⁶⁷ Anon., *The Method of Learning to Draw in Perspective Made easy and fully Explained. ...Chiefly from the MMS. of the Great Mr. Boyle* (London, 1732). 本書のタイトルには主としてボイル (Henry Boyle, Lord Carleton, d.1725) の手稿とあるが、それは 2 点にすぎない。

⁶⁸ Ibid., 1-16.

⁶⁹ Ibid., 16-24.

⁷⁰ Ibid., 25-35.

⁷¹ Ibid., 38-58.

⁷² 後述、本論文の第 3 節 (2) [b] 参照。

⁷³ Gibbs, 'Historical Survey -II', 93.

⁷⁴ 夫人の子息ホレス・ウォルポールの別荘における財産目録には、夫人の作品 (中国風塗装を施されたキャビネット) もある。Horace Walpole, *A Description of the Villa of Horace Walpole at Strawberry-Hill, near Twickenham* (London, 1774), 36-7.

⁷⁵ Anon., *Arts Companion, or a New Assistant for the Ingenious. ... Containing the Art of Drawing in Perspective made easy and fully explained...* (London, 1749).

⁷⁶ Anon., *The Art of Drawing in Perspective: The Doctrine of Perspective is clearly and concisely treated of...* (London, 1755 / 57 / 68 / 69 / 97).

⁷⁷ Bernard Lens, *A New and Complete Drawing-Book; For the Curious Young Gentlemen and Ladies, trans. from the French of Monsieur Gerrard De Lairese* (London, 1751 / 77).

⁷⁸ Edwards and Darly (engravers), *A new Book of Chinese designs calculated to improve the present taste. Consisting of figures, buildings, and furniture, landscapes, birds, beasts, flowrs. [sic] and ornaments;...(London, 1754).*

⁷⁹ *The Ladies Amusement; Art of Japanning Made Easy.... Drawn by Pillement and other Masters*, 2nd ed. (London, 1759-60 / 62 / 71[?]). 本論文では、1762 年版のリプリント版を使用した (Newport: Ceramic Book Company,

1966).

⁸⁰ Christopher Gilbert, *The Life and Work of Thomas Chippendale* (London: Christie's, 1978), 111.

⁸¹ Robert Sayer, *Robert Sayer's New and Enlarged Catalogue for the Year MDCCLXXIV*. ([London], 1774), 116.

⁸² W. S., *A Family Jewel; or the Womans[sic.] Councillor* (London, 1704).

⁸³ William Salmon, *The Family Dictionary: or, Household Companion*, 4th ed. (London, 1710 / 16). 著者は注 60 の William Salmon と同一人物である。

⁸⁴ *Ibid.*, 245f.

⁸⁵ Peregrine Montague, *The Family Pocket-book: or, Fountain of true and useful Knowledge* (London, [1760?]).

⁸⁶ *Ibid.*, 74.

⁸⁷ d' Emery, *op.cit.* (London, 1711). これは、前年にパリで刊行された *Recueil de curiositez rares et nouvelles* (Paris, 1710) の英訳。

⁸⁸ *Ibid.*, 179-82.

⁸⁹ *Ibid.*, 289-352.

⁹⁰ Dossie, *op. cit.*, I, xx.

⁹¹ *Ibid.*, I, Dedication, A2. The Society for the Encouragement of Arts, Manufactures and Commerce は、工芸と商工業奨励の目的で、1754 年、ロンドンに設立された。ギブズは、ドズィが化学の専門家としての立場から本書を記したとしている。Gibbs, 'Robert Dossie (1717-1777) and the Society of Arts', *Annals of Science*, 7 (1951), 149-72 (153).

⁹² 例えば 17 世紀の金属塗装の技法、Dossie, *op. cit.*, I, 419. 本論文、第 3 節 (2) [b] 参照。

⁹³ ポンティプールの金属への中国風塗装、*Ibid.*, I, 384. 本論文、第 3 節 (2) [b] 参照。

⁹⁴ *Ibid.*, II, 361-73. 本論文、第 3 節 (2) [b] 参照。

⁹⁵ *Ibid.*, II, 372-3.

⁹⁶ *Ibid.*, I, 407.

⁹⁷ *A Complete and Faithful History of Experiments and Observations* (London, 1702/03). なお *Arts Improvement* (London, 1715/23) はその改訂版である。

⁹⁸ E. T. Joy, 'The Overseas Trade in Furniture in the Eighteenth Century', *Furniture History*, I (1965), 6-7.

⁹⁹ Gilbert, *Pictorial Dictionary* より算出。

¹⁰⁰ Huth, *op. cit.* より算出。

¹⁰¹ Symonds, 'Furniture Exports', 58.

¹⁰² *Ibid.*, 59.

¹⁰³ *Ibid.*, 59.

¹⁰⁴ グレンディ (Giles Grendey, 1693-1780) は、商標を使った数少ない業者の一人。

¹⁰⁵ Lacquer Museum, Münster. Edith Strässer, *Oriental and European Lacquer from BASF Lacquer Museum* (Cologne: BASF, 1977), 95.

¹⁰⁶ *Ibid.*, 91.

¹⁰⁷ Monika Kopplin, *European Lacquer, Selected Works from the Museum für Lackkunst Münster* (Munich: Hirmer, 2010), 68-9.

¹⁰⁸ Joseph Downs, *American Furniture. Queen Anne and Chippendale Periods* (New York: Macmillan, 1952), XXIX.

¹⁰⁹ Robert W. Symonds, 'The Export Trade of Furniture to Colonial America', *Burlington Magazine*, 77 (Nov., 1940), 153.

¹¹⁰ Ibid., 154.

¹¹¹ Downs, op. cit., XII-XIII.

¹¹² Huth, op. cit., 47-8.

¹¹³ Joseph Downs, 'American Japanned Furniture', *The Metropolitan Museum of Art Bulletin*, 28, 3 (1933), 46.

¹¹⁴ Morrison Heckscher, 'Philadelphia Chippendale: The Influence of the Director in American', *Furniture History*, XXI (1985), 287.

¹¹⁵ 以下本項については次の拙稿参照。鈴木裕子「ポンティプールのジャパン・ウェア —黒い光沢と金の絵柄の系譜—」『デザイン史学』第11号(2013年)、59-86。

¹¹⁶ Frederick W. Gibbs, 'Invention in Chemical Industries', in Charles Singer, and others (eds), *A History of Technology*, III (Oxford: Oxford UP, 1957), 676-706 (697).

¹¹⁷ Frederick W. Gibbs, 'Historical Survey -II', *Annals of Science*, 8 (1952), 88-95 (94-5); Dossie, op. cit., I, 419.

¹¹⁸ Ibid.

¹¹⁹ Gibbs, 'Historical Survey -III', *Annals of Science*, 9 (1953), 197-213 (197-202).

¹²⁰ William D. John and Anne Simcox, *Pontypool and Usk Japanned Wares* (Newport: Ceramic Book Company, 1966), 33-6; Dossie, op. cit., I, 384.

¹²¹ William Cox, *A Historical Tour Through Monmouthshire* (1801; Brecon: Davis and Co., 1904), 204.

¹²² 以下本項については前掲拙稿「チペンデールのシノワズリ —中国風彫飾と中国風塗装を中心に—」、54-67。